

『判断力を身につけるとは』

相変わらず人の命にかかわる悲惨な事件が次から次へとテレビや新聞等で報道されています。また、振り込め詐欺等の特にお年寄りをターゲットにした事件も減るところか、ますます増えているように思われます。その手口もより巧妙になってきており、被害額も相当なものです。

常に弱者が狙い撃ちにされるといったような事件が大半を占め、昔の日本人のよさ「弱きを助け・・・」という精神はどこへいったのやらと考えさせられます。

事件を起こした加害者たちからは、「いらいらしてかっとなった」「自分の思う通りにならないから」などと極めて短絡的で自己本位な自分の思いや感情が最優先といった言い訳が多すぎます。

このような「相手のことはどうでもいい、自分さえよければ」といった人間がなぜ生まれるのでしょうか。その確かな理由についてはよくわかりませんが、社会の構造が大きく変化しつつある複雑な今の時代を生き難いとか良好な人間関係を築きにくいなどと苦悩している人も多いのでしょうか。将来への夢や希望を持たずに、何事に対しても悲観的なもの見方しかできなくなっているのかもしれないかもしれません。また、何をやってもうまくいかないとか思い通りにならないことの原因を自分を顧みることなく全て他のせいにしてしまうという偏った考え方しかできずに、他人を犠牲にしてもやむを得ないという結論に至るのかもしれないかもしれません。

ともあれ、そのような人間が増えていくとしたら、ますます人間不信が当たり前といった世の中になることに不安をおぼえます。

さて、そうした人間たちの自分勝手に他人に危害を及ぼしても構わないという考え方は、その生涯の中のどの段階で持ち備えるのでしょうか。多くは社会に出て、世間の荒波の中で揉まれているうちにそのような考え方に陥ると思いたいのですが、もし、幼少期から成人に至るまでの成長期の中で、そのような考え方が備わってしまうとしたら大いに憂慮しなくてはならないことです。

「三つ子の魂百まで」という諺が意味する幼少期の性格は大人になってもあまり変わらないものというのはその通りと思います。しかし、幼いころから人に迷惑をかけるような素質を持ち続け、大人になってからも変わらないとしたら、この三つ子の魂は大いに変え

ていかなければならないことです。その要の一つとして善悪の判断力を身につけさせることが大切なこととなります。

今、子どもたちへの善悪の判断の継承が問題視されています。かつては古い話ですが、会津藩に伝わる「什の掟：ならぬことはならぬものです」のように厳しい教えに従って、子どもたちは善いこと駄目なことを強制的に教えられていました。また、それほど古くなくても、昔からその家に伝わる家訓的な教えがあったり、宗教上の理由でやってよいこといけないことが示されている家もありました。家訓や宗教がなくても、父親の権威が強くその子どもは、理屈なしにその言いつけに従うことが当たり前の時代もありました。

しかし、今はというと、家族のあり方や人々の生活スタイルが大きく変化をとげ、古いしきたりから教えをうける善い悪いの伝承はほぼ皆無となったと言えるのではないかと思います。また、マスコミ等からの膨大な量の情報によって、人々の価値観があまりにも多様化してしまった現状もあります。

子どもの自主性・主体性を尊重するなどの理由による放任主義が蔓延すると、いったい何を拠り所に行っているのか、好き勝手な判断を下し、しかもその判断が誤っているのに、全くそれに気づくことができない子どもたちも増えます。

大人が善悪の判断を教え込もうと熱弁をふるっても、子どもたちにとっては、ただのお節介、素直に受け止めようとはしません。このように善悪の判断は教えたからといって、すぐにその通りになるといった甘いものではないのですが。

子どもたちに善悪の判断力を身につけさせるためにはどうしたらよいのでしょうか。このことに特効薬的、短期的な方策を見つけることは難しいことです。しかし、肝心なのは、子ども自身、自ら気づいていくことがとても大事になります。

判断するということは、どんなに考えをめぐらせても、常に最善で、最良で、何一つ欠点のない判断ということはありません。常によりベターな判断をすることを心がけることが大切で、しかも、他を尊重しようとする思いが込められていることが大切です。

これからの子どもたちには、様々な考え方があることを知り、他の考え方を受け止め、自分の考え方も示し、その考えに対する他からの意見を参考に、自分なりの判断を下し、その後、自分の判断が良かったのかそうでなかったのかを顧みることに努めてもらいたいと考えます。そして、このような取組と機会を増やし、人としての生き方についていろいろと考えを深めていってほしいものです。